勇気と裕樹は違うモノなんです

めんたんぴん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勇気と裕樹は違うモノなんです

【Ｎコード】
Ｎ７９５０Ｙ

【作者名】
めんたんぴん

【あらすじ】
相変わらずの異世界モノです。
ただ主人公は自分の意志で呼ばれますが。
バトルはあっさり風味になると思います。
貧乳は出てきてもサブです。おっぱいは正義なんです。

ありきたりのプロローグ（前書き）

えー昨日投稿したのが、作者ポカミスにより消失しました・・・。
また一から書き直しました・・・。
主人公が少し、てか大分変わったかも。

ありきたりのプロローグ

俺の名は北条裕樹(ホウジョウユウキ)。
一介の高校生である。彼女は居ない・・・居た事も無いし予定も無い（涙）。

2年前の飛行機事故で、家族は全員失った。
今は、辛うじて親戚と呼べる程度の”ほぼ他人”の家に厄介になっている。
両親の財産は、ほぼ全部、親戚と言い張るハイエナどもに食い散らかされた。
今はその内の一匹（いや夫婦だから2匹か）に世話になってるつーのが何ともな。
おまけに、
「食わせてやるんだから有り難く思え」
と来たもんだ。
嬉しくて涙が止まらないですよ。全くね。

家族と財産全てを失って、茫然自失状態からも覚めた俺は、こいつら全員ブチ殺そうと思った時期もあった。

そんな俺を諌めてくれたのは、剣の師匠だった。
俺の実家の近所に住んでた爺さんなんだけど、夕雲流(せきうんりゅう)って剣術の継承者だったんだ。
俺はその爺さんに、ガキの頃から習ってたんだわ。
きっかけは何だったかなぁ？忘れた。
あ、剣道じゃ無くて剣術ね。
剣道はスポーツ。剣術は実戦用。
大体さ、”決められた部位以外打っても無効”とかさ、実戦で言

ってられ無いっしょ？
そりゃ確かに、面のトコ斬られりゃ致命傷だけどさ、肩斬られても平気！な訳無いべさ。

試合にしてもそう。江戸時代は平和だったから、「試合＝腕比べ」になっちゃったけど、本来は「死合＝果し合い」なんだよね。
宮本武蔵が良い例。

まーそんなのはどーでも良いか。
取りあえず師匠に「生きてる事を感謝すべし」みたいな事言われて諭されて、復讐はやめた。
あいつらは汚い奴らだけど、家族の仇じゃ無いしね。

んでまぁ、遺産盗った奴らに養われつつ、休日は爺さんトコ通って修行してたんだけど、こないだ爺さんも逝っっちまった。
形見にエラい業物遺してくれたけどさー。こんなの貰って良いのかよ、ホント。
「村正」
そう、あの村正。
妖刀ってのは都市伝説の類だけど、銘刀なのは事実。実際切れ味は凄まじい。
売れば何千万とかになるっぽい。真正（ホンモノ）なら、だけど。
俺は鑑定眼とか無いし。
村正の特徴には当て嵌まってるんだけどさ、写し（コピー）とかもあるしねぇ。
まー売る気なんざさらさら無いし、切れ味抜群なんで問題無いしな。

ま、そんな訳で、師匠まで居なくなっちまったから、今の俺には

味方って言える人は皆無。
なんとなーく学校行って、帰って来たらゲームしてるだけ。最近素振りとかもサボってるなぁ。
鈍ってきたなー、とか思いながらの下校。歩いて３０分の距離だしな。
帰ってもハイエナ夫婦はどーせ留守だろーし、晩飯どーすっかなー？
なんか食って帰っても良いんだけど、一応育ち盛りなわけで、またすぐ腹減るんだよなー。
「おんや？何か光った？」
近道の公園抜けて歩いてたら、池のほとりで何か光った気が。
この池って、昔っからあるらしくて、公園の池には珍しく人工じゃ無いそーな。
「お宝だったりして♪」
んな訳無えよ、とボケツッコミしつつ近付いてみる。
「ビー玉？」
にしちゃ綺麗だなコレ。ガラスとは思えん。
”助けてください”
「何奴！？」
剣術齧ってるし、愛読してるのは専ら歴史・時代小説だったりす

る俺は、どーも時代錯誤な台詞を吐くクセが・・・。

”私の声が聞こえるんですか?!”

「・・・」

なんか女の子っぽいな。しかぁし周りにはだーれも居ない。この声はどっから・・・ビー玉?

「あーあー、テステス。聞こえますかー?」

試しにビー玉に話しかけてみる。周りに誰も居ないとは言え、我ながら胡散臭過ぎるアクションなんで、無論小声である。

”ッ!き、聞こえますっ!お、お願いです、私をここから出して下さいっ!”

「ここって?このビー玉からか?」

何フツーに会話しとるんだろ俺。

あー、ゲームのやり過ぎかなー?ラノベとかも読んでるしなー。脳がもうアッチ方面なのか・・・。

”あっ、いえその、それは通信用の・・・”

「あっそ。んじゃアンタはどこにいるねん?それがまず分からんぞ。」

”へ、部屋ですが・・・”

天然かよっ!

「お前・・・バカだろ?」

アンタからお前に降格。
”ひ、酷いですっ！いきなりそんなっ！”
「だってお前、世界にどんだけ部屋があると思ってるんだ？」
”あ、それもそうですね・・・”
なんだコイツは・・・
「んで、そこはドコの部屋なんだ？」
”私の部屋です”
「・・・おーけー。サヨウナラ。」
”あっ！ま、待ってくださいっ！ホントにそれ以上判らないんですっ！”
「あ？何故？」
”わ、私・・・ココから出られないんです・・・”

なんとっ！監禁となっ！？いや事故か？
いやいや、事故なら大まかな居場所くらい判るよな。多分。

「ケーサツに連絡するから、官姓名を名乗れ。」
”ケーサツって何ですか？カンセーメーって？”
「ケーサツ知らんのか？日本人だろお前？」
”いえ、私は王魔族です。ニッポンジンって種族ではありません”
「ってお前日本語で喋ってるじゃんか？・・・オウマゾク？」
”ご存知ありませんか？”

ご存知あるわきゃ無ぇ・・・。日本人じゃ無いガイジンだとしても、ここまで流暢に会話出来るのにケーサツ知らんとか有り得ねーよな？
これはもしかして第○種接近遭遇とかじゃあるまいか？
いやそもそもビー玉で会話してる時点でアレなんだよな。俺ってもう末期かもな・・・。

”あ、あの・・・まだそこにいらっしゃいますか？”
「・・・あ、あぁスマン。んでお前さ。」
”はい？”
「具体的に、どーすりゃそこから出られるんだ？」
”私以外の誰かが、この部屋の扉を開けてくだされば・・・”
「外からは開けられないのか？」
”まず無理です。この結界を破れるのは発動した本人のみです”
結界と来たか・・・こりゃもうカンペキにアッチ方面だな。
それを理解しちゃってる俺も俺だがな。

「その本人はもう居ないって事か？」
”・・・父は亡くなりました”
「スマン。」
”いえ・・・もう１５０年も前の事ですから・・・”

はい決定。こいつ人外。デムパじゃ無ければ、だが・・・ビー玉通信の時点でもうアレだしな。

「そうか・・・んでお前は、俺に来て欲しいっつーわけだな？」
”はいっ！来ていただけるならば・・・”
「どうやって行けば良い？」
”私が召喚します！”
「結界があるんだろ？んなの弾かれねーか？」
”結界は、異世界には作用しませんから・・・”
「あー、やっぱ異世界なのね・・・。」
”はい、それで、あの・・・その・・・”
「行ったらコッチにゃ戻れない、ってか。」
”あぅ・・・はい、そうなんです・・・呼ぶ事は出来るんですが、その・・・”

「なぁお前・・・１５０年ひとりぼっちだったのか？」
”う・・・はい・・・ずっと一人です・・・”
「ちょっと考えさせてもらおう。連絡はこのビー玉持ってりゃ良いのか？」
”あっ、はい！それを握って私の名前を念じてくだされば・・・”
「・・・お前、なんて名前？」
”あ、あぁぁぁーっ！名乗りもせず、し、失礼いたしましたっ！私はエルクレア・ミューリィ・バルクホルンと申します！”
「長げーなおい。エルクレ・・・クレアで良いか？」
”／／／あ・・・はい、そ、それで構いません／／／”

なんか照れてるっぽい気配。かわいーじゃねーか・・・ハッ！！

「あー、クレア。つかぬ事を訊くが・・・」
”はい？”
「お前、スリーサイズは？」
”／／／そっ、そんなの言えませんっ！／／／”
「教えてくれなきゃサヨナラだ。」
”そ、そんなっ！”

我ながらサイテーだな。つかスリーサイズは通じるのか。

「だってよー、もしかしたらコッチの生活捨てて行くんだぜ？んで行ってみたら相手は全然タイプじゃ無かった・・・なんてイヤだしぃ？」
”うぅ・・・そ、それでは、あの・・・私の画像をお送りしますから、それで、その・・・”
「画像送れるのか？すぐ送りなさいっ！出来れば全裸のをっ！」
”／／／そんなのありませんっ！・・・ただその、送るのに時間がかかります・・・”

そいやまだ公園だった・・・まずおうちに帰るか・・・。

五分五分

家に帰って着替えて待つこと数分。ビー玉が点滅し始めた。

「来たか！」

期待半分、失望の悪寒半分である。

ビー玉を握り締め、念じてみる。

”お～い、クレア～？”

”あっ・・・えーと、その、あの・・・”

「ん？」

”・・・お、お名前をまだ・・・”

「おおぅ！みすていく！　まいねーむいず　ゆーき　ほーじょー」

”ま、まいねーむいず　さん・・・ですか？”

日本語はおkなのに英語は駄目なのかよ・・・自慢出来る英語でも無いが。

「あー、ユーキが名前で、ホージョーが苗字。」

”ミョウジとはなんですか？”

「・・・あー、氏族の名乗り、が近いのかな。ホージョー家のユーキって意味。」

”ファミリーネームの事ですね。分かりました。”

なんでここだけ英語なんだよ・・・わけわかんねー世界だな。

「んで早速だが、画像は？」

”え？お、送りましたけど・・・？・・・あぁっ！送信出来ませんでしたになってるっ！”

「あ？」
”す、すみません・・・なんか画像は送れないみたいで・・・”
「むぅぅぅ。」
”お、怒らないでくださいぃ”
「いや、怒ってねーよ。悩んでるだけ。」

そいやこいつ、俺の事何にも訊かねーよな。遠慮してんのか？
「なーお前さ。俺がどんなヤツか気にならんの？なんも訊いてこねーけどさ？」
”それは・・・気にならない訳無いです。
でも・・・ユーキさんは、全てを捨てても私の為に来てくださる・・・かも知れないんですよ？
だったら・・・来てくださるのなら、全てを受け入れるのが、私の務めでは、と・・・”

そうだなー。考えてみたら、お互い声と名前しか知らねーんだよな。
向こうが受け入れてるんだもんな。こっちも受け入れるべきだな。
行ってやる、とか威張ってみても、俺だって”この世界から逃げられる”って喜んでんだもんな。
貸し借り無し。五分五分で丁度良いよな。

「堅苦しいヤツめ。」
”あぅ・・・だ、だって・・・”
「まー良いわ。んで、そっちには何か持ってけるのか？」
”えっ！き、来てくださるのですかっ！？”
「まーな。こっちに未練とかねーしな。」
”あ、あ、あ、ありがとうございますっ！！”

「で、何か持ってけるのか？」
”それは・・・何も無いです・・・”
「着のみ着のままかよ！」
”あぅ・・・いえ、その・・・服も・・・”
「なんだとーっ！？マッパでご到着！かいっ！」
”す、す、す、すみませんっ！”
「うーむ・・・服とか用意しとけよ。」
”そ、それは勿論ですっ！”
「あー、先に言っておくがな・・・」
”はい”
「俺はスケベだからな？
お前が俺好みの美少女だった場合、まず確実に押し倒してエロい事するぞ？
それでも良いのか？」
”／／／か、構いませんっ！私も魔族です！ユーキさんがどんな性欲魔人でも受け切ってみせますっ！”
「性欲魔人てお前・・・。まーあれだ、お前が俺好みじゃ無ければ何もしないから。手も触れんぞ。」
”凄い落差なんですね・・・”
「おーよ。それが男ってモンよ。」
”・・・”

なんか呆れられてる気もするが、構うもんか。
こいつが残念賞だったら、別の娘探せば良いんだもんね！

「んで、いつ召還するんだ？」
”で、でも・・・ホントに良いんですか？”
「くどいぞ。こっちに未練は無い！」
”わ、分かりました・・・準備しますので少しお待ちください”
「うむ。良きに計らえ。」

確かにコッチに未練は無いけど・・・村正は惜しいなぁ。師匠の形見だしなぁ。
もしかしたら、って事もあるし、ダメ元で持っててみよう。

ふと気づくと、足元が光ってる。
おー、魔法陣だよな、コレ。

”あ、あの・・・”
「魔法陣なら出たぞ？」
”え？良かったです。ちょっと不安だったんで・・・”
「ホントに大丈夫なんだろーな？次元の迷子とかイヤ過ぎるぞ？」
”魔法陣さえ出せれば問題無いはずです”
「ハズ？」
”あぅ・・・その、実践は初めてですから・・・”
「成る程な。理論的には問題無い、でもやった事は無い、と。」
”はい・・・だって、声が届いたのもユーキさんが初めてなんです”
「１５０年ぶりの会話だったってか？」
”はい・・・嬉しくてずっと涙が止まりませんでした・・・”
「顔が見えなくて残念だ。」
”悪趣味ですっ！意地悪ですっ！”
「ところでさ、肝心な事訊き忘れてたんだが・・・」
”何ですか？”
「お前、女だよな？」
”／／／女ですっ！赤ちゃん産めますっ！”
「ま、どっちでも良いか。」
”何でですかーっ！”
「何でって、お前はその部屋から出られりゃ良いんだろ？」
”そ、そうですけど・・・”

「なら、俺はドア開けてやれば良いだけで、あとは自由なんだよな？」
”・・・はい”
「そーゆー意味でなら、お前がどんなのでも構わないわけだ。」
”どんなの・・・”
「けどさ・・・前にも言ったけど、呼ばれて行くなら美少女に呼ばれたいんだな。男としては。」
”が、頑張りますっ！”
「いや、頑張ってどーなるモンでも無いだろ・・・」
”いーえっ！頑張ってユーキさんに気に入られる女になってみせますからっ！”

なんか男として凄いらっきぃな事言われた気がする・・・。
美少女だと良いなー・・・フツーお約束として美少女のハズだけど、”向こうの感覚では美少女。でもこっちでは・・・”って可能性もあるしなー。
最悪人型じゃ無いかも、だし。スライムの美少女とか言われてもな？

ええぇ！男は諦めが肝心だ！

「あー、クレア。」
”は、はい”
「呼んでくれ。」
”っ！・・・はい！”

魔法陣の光が強くなってきたな。
なんか身体が浮いてくよーな・・・
眠いぞ・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7950y/

勇気と裕樹は違うモノなんです

2011年11月24日00時49分発行